

ニューオーリーonzの歴史的核心地

——ヴェューカレ (Vieux Carre)——

藤岡ひろ子

- I. はじめに
- II. 問題の設定と方法
- III. 植民基地 Vieux Carre
 - 18世紀——
 - (1) 植民基地の自然的基盤
 - (2) 基地の構造
 - a. 囲郭・塁・濠
 - b. 内部の機能配置
 - (3) 初期の基地開発会社
- IV. 民族の複合体 クレオール都市
 - 19世紀——
 - (1) 民族間のソーシャルミックス
 - (2) クレオール都市の構造
- V. 郊外化と地域分化現象——19世紀——
 - (1) 地域分化の触発要因と郊外化
 - (2) 三つの自治行政区とサブエリア
- VI. 歴史的核心地の存続
- VII. むすび

I. はじめに

一般に複数民族の居住は世界の港湾都市で顕著に見られるが、その現象が都市域に与える影響は複雑で多様である。アメリカの港湾都市は、遠隔地からの移民が最初に到着するゲートウェイとしての性格がきわめて強い。そこでは民族の接触、同化、隔離の運動が繰り返され、都市内部や周辺地域との間に、絶えず人口流動をおこしている。その際、諸民族の文化的特性が都市構造に何らかの影響を与えずにはおかない。

研究対象地域のニューオーリーonzの歴史核

である Vieux Carre は、ミシシッピ河口から約 175 km 遡った河岸に建設された町で、現在も18世紀以来の歴史的遺構をよく保存し、強烈なクレオール文化の拠点として、ニューオーリーonzの活力ある都心機能地区を形成している。

この歴史的な核心地は、フランス統治の時期(1718~1762年)、スペイン領(1762~1801年)、再びフランス領(1801~1803年)の時期を経て1803年にアメリカ領となったが、各時期にカナダ、フランス、イギリス、アフリカ諸国、カリブ海諸国、その他からの渡航者が流入した。その間、市街地の境域は長期にわたってほとんど拡大することがなく、囲郭の内側の限定された空間で、民族間のソーシャル・ミックスをおこした。その中で特有の社会構造と、それに適応する機能配置が進行した。その要因は、この囲郭都市の後背地は Cypress Swamp という広大な湿地で、近代的排水工事が行われるまでは、ミシシッピの自然堤防上に孤立するような都市であったからである。

19世紀はじめから、郊外への市街化が進行しはじめ、同時に北部からアングロアメリカ人の流入がはじまった。その結果、都市の拡大は、民族的な文化に根ざす明瞭な地域分化現象と連繫していった。以上のような歴史的経緯をもつこの港湾都市はアメリカの中でも特異な港湾都市であり、複数民族の流入によって市域にどのような構造変化が生じるかを考察するための適切な事例と考える。

II. 問題の設定と方法

歴史的核心地¹⁾とは、歴史的都市の中核部であり、その都市の発生の原核となった地区である。研究対象都市の Vieux Carre は「方形の旧市」を意味する語であり、現在もニューオーリーonzの原初の地区にこの呼称が用いられる。また、ここを人々は、初期の開拓者であるフランス人とその文化的特性を強調して、フレンチ・クォーター (French Quarter) とも呼んでいるが、両者は同一の地区である。

この旧市の境域は、南はミシシッピに面し、19世紀初期まで三方が濠 (Ditch) や囲郭によって限定された空間である。時期によって多少のちがいはあるが、長さ約 1,500m、幅 (奥行き) 約 750m の、ほぼ矩形に近い地域である。

アメリカでは、ニューオーリーonzの地域研究は歴史学、社会学、建築学などの各分野から多角的に検討されてきた。一般に自然地理学の分野²⁾からのアプローチが多いのは、ニューオーリーonzの地質・地形が重要な問題を含んでいるからである。また、地誌的・歴史地理的研究³⁾にも多くの業績が報告されている。

わが国の研究では、世界の港湾の比較研究を集大成した山口平四郎⁴⁾が、ニューオーリーonzの港湾機能を中心に問題を展開した。内外における港湾都市研究の成果⁵⁾のなかで、港湾と都市に関する問題では、一般に港湾の機能の諸問題とその都市のかかえる諸問題との関係が問われている。

筆者は、港湾機能そのものが都市に与える影響という角度からよりも、他地域と接触の多い港市における多民族居住が地域形成にどう対応したのかに関心を抱くものである。したがって、複数民族の共存する都市の成長過程における都市構造の変化をとらえ、民族相互の文化的特性が都市構造に与える影響を考察することに重点をおいた。また、この研究は、先に筆者がおこなってきた、神戸⁶⁾、横浜⁷⁾などの外国人居留地、北欧におけるドイツ人居留地⁸⁾、上海の租界⁹⁾などの歴史的都市との比較研究の資料とす

る目的をもつものである。

研究の主題として、

- ① 18世紀における植民基地の自然的基盤と都市構造にどんな特性が見いだされるか、
 - ② 19世紀を中心に形成された多民族による複合社会が都市地域の文化景観や構造にどのように反映したのか、
 - ③ 19世紀初め、歴史核の外側におけるアメリカ都市の発生が地域にどのようなインパクトを与えたのか、
- などの問題を提起する。

その場合、各問題の時期は、②と③においてオーバーラップしているが、各問題ごとに資料を用いて都市の機能配置に注目し、問題の時期を代表する、1725年、1770・1798年、1836年などの地図を分析した。また、資料を補うために、1986年の二度の現地調査により問題点を確かめることに努めた。

III. 植民基地 Vieux Carre ——18世紀——

(1) 植民基地の自然的基盤¹⁰⁾

ニューオーリーonzの都市設定の目的は、主

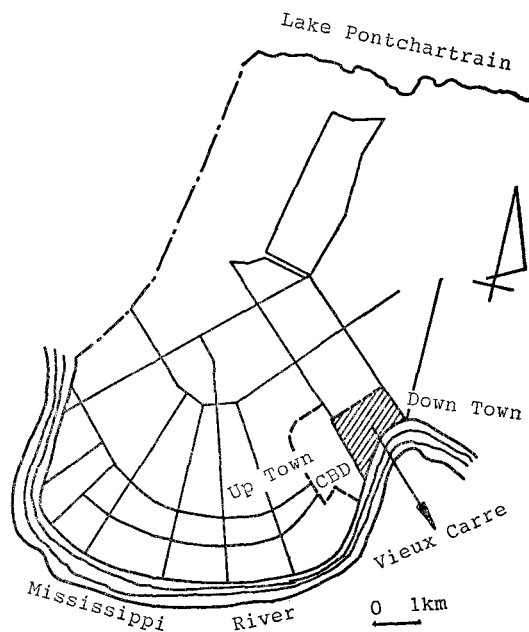


図1 ニューオーリーonz見取図

としてミシシッピーにおけるフランスの植民地開発と、そこでの生産の拡大にむけられた。最初の開発者は、フランス系カナダ人の *Sieur de Bienville* とその一行である。1718年に彼らの選んだ位置はミシシッピー河の三日月型湾曲部の自然堤防の高みで、そこから背後のポンシャトレーン湖 (*Lake Pontchartrain*) に通じる水路があった。

自然発生的都市の原初の集落立地には自然条件に何らかの利点が見いだされるか、あるいは自然的な不利があったとしても、それを補うに足るような資源や後背地に価値が見いだされるかのいずれかの場合が多い。しかし、ニューオーリーヌの場合は、カナダにおけるフランス植民地との関連やミシシッピー下流の植民地獲得の戦略に主眼を置いた基地選定が優先した。そのために、人間の居住にとってはあまりにも不利な地理的条件が多かった。

第一に、基地はミシシッピー河の軟弱なデルタ上にあった。このデルタは、更新世にさかのぼる基盤の上を、上流から押し流されたおびただしい氷河堆積物がおおっている。この氷河土壌は巨大な量の、しかも雑多な破片を含んだもので、その主な含有物は粘土や植物の融解物の入りまじったものである。基地はその泥土の中に辛うじて高みを形成する自然堤防を頼んで成立したものである。

ミシシッピー下流のいくつかの低湿なデルタは、年々多量の泥を含む急流によって侵食されつつけてきた。下流域に形成されたデルタのいくつかは、河流の変化とともに沈下している。この湿地デルタ縁辺の侵食の現状を報告した *David Chambers*¹¹⁾ は、その侵食の勢いを「一年間に約55平方マイル、一日に実に100エーカーの侵食が進行している」と述べている。

市域は現在も大部分が海拔0m以下で、海拔4.6m以上の地域はきわめて少ない。もし二十世紀以後の人工的な防護堤と大規模な近代的ポンピングシステムの発達がなければ、この都市の市域は底に沈む運命にあった。ニューオーリーヌが“*Isle of Orleans*”という別の呼び名

を持つのは、この現象に由来している。

基地の位置した自然堤防は、背後に進むにつれてその高さを減じている。フランス人は、自然の高みを *Levéé*¹²⁾ と呼んだが、ここだけが、凶暴な河流と豪雨時の災害から免れることの出来る唯一の場であった。背後の盆地状地形の湿地は *Cypress Swamp* と呼ばれるが、そこに多くの沼や湖が形成されている。農耕や集落の形成のためには大規模な排水が必要であったが、排水工事の進行にともない土壌内部の含有物が凝縮して、逆に地盤沈下の要因となる。そのために、排水後の地盤沈下の対策として、河岸の防護堤の建造と修理にニューオーリーヌは莫大な予算を計上しつつけてきた¹³⁾。

当初のフランス人は、この自然堤防から一歩もといつてよいほど、背後へ居住地を拡大することはできなかった。不愉快きわまる泥湿地の中に多くの水路が発達し、その中のいくつかは、さらに背後にあるポンシャトレーン湖に通じていた。このような水路は、この辺りではバイユー (*Bayou*) と呼ばれている。1798年の地図には *Bayou St. John* がよく表現されている。インディアンにとっては、これらの水路は当時の主要な交通路であり、初期のフランス人たちはこの水路を通じて往復するインディアンのもたらす物資に依存することが多かった。

つぎに、気候の不利が問題である。*Vieux Carre* はその位置が亜熱帯にあり、降水量は年平均1,500mm前後であるが、自然堤防から背後の湿地にかけての鍋底型の地形では滞水は常習的で、その上にしばしばハリケーンのもたらす災害があった。

1750年代の一フランス人の記録¹⁴⁾ には、「一年のうち4, 5カ月は多雨であり、町の4分の3は通行が困難であり、不健康な町」と記されている。おびただしい蚊の発生、熱帯性疫病の流行により、多くの人が罹病した。したがって、湿地におおわれた後背地への都市域の拡大は困難であった。

以上のような自然的基盤の不利にもかかわらず、フランス人がなぜこの地を基地として選定

したかを推定することは容易ではないが、当時の情勢の下では、ミシシッピの河口を制する基地の確保がフランス人にとって必須の課題で、どのような困難があっても遂行する必要があったのであろう。それによってカナダ、アメリカにおけるフランス領土の安全を得ようと意図し、さらに西インド諸島でのスペインの植民地貿易の分け前を獲得する意図があったことは明らかである。

一方、基地の不利な自然条件は、競争者の侵入に対しての武器となった。下流の河口から175kmのこの基地は敵の遡上を手間取らせ、湿地に通じる水路は、自らが後退する場合の脱出経路とする配慮もあった。

以上のように、植民基地の自然的基盤は、長期にわたって基地の町を閉じ込める形となったが、この自然を有利に転化させ、大港湾都市を

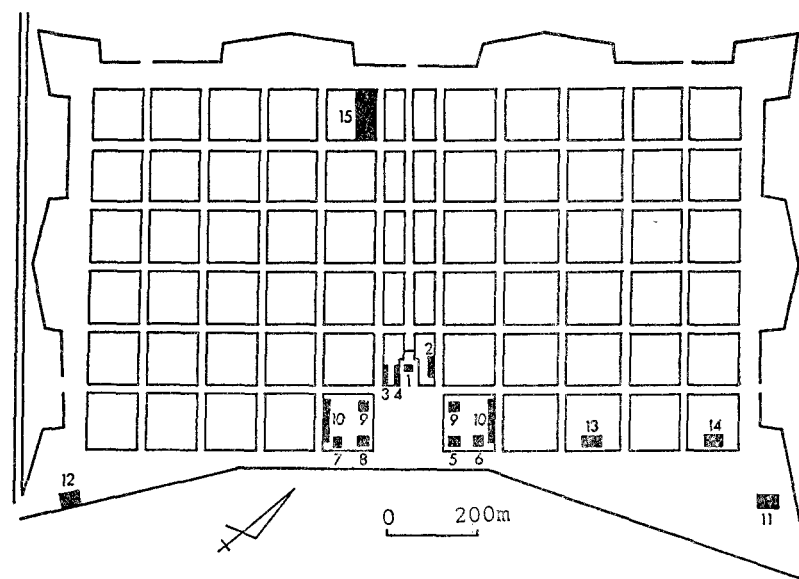
形成した二十世紀の土木技術は画期的なものであった。

(2) 基地の構造

基地の構造を確認するために、初期のフランス領時代は1725年の地図を、スペイン領時代は1770年の地図を基本に、主要機能を記入して、図2と図3を作製した。

初期の都市プランは、約4～5mの高さの自然堤防上に、方格条里プラン (grid plan) によってレイアウトされた。基地の幅を初めは9ブロック、のちには11ブロックに分割し、奥行きを5条の道路で切って、市域を66のロット¹⁵⁾に分けている。

方格プランの起源は古いが、植民都市の例では、16世紀のインドにおけるポルトガル領のダマン (Daman)¹⁶⁾、17世紀のフランス領のポン



- | | | | | |
|--------|-------|-------|--------|---------------|
| 1 教会 | 2 司祭館 | 3 守備隊 | 4 牢屋 | 5 行政府 |
| 6 長官公舎 | 7 事務局 | 8 監督局 | 9 門番 | 10 Companyの倉庫 |
| 11 火薬庫 | 12 風車 | 13 病院 | 14 兵器庫 | 15 墓 |

図2 ニューオーリーンの機能配置 (1725年)

資料: Wilson, S. Jr.: 'The Vieux Carre, New Orleans, Its Plan, Its Growth, Its Architecture': Historic District Demonstration Study, Conducted by Bureau of Governmental Research. 1968, p. 19.

ディシュリー (Pondicherry)¹⁷⁾の都市図などに見ることができる。アメリカの18世紀の都市の中では、サンフランシスコ、シアトル、フレズノなどが同様のパターンであった¹⁸⁾。いずれも、都市が面している水路に対して直角の街路をもつ方格都市である。

grid plan は、基本的に均等分割であるため、土地管理に利便さがあり、また建設工程が簡略であることから、ニューオーリーonzの計画者たちが、植民地の先例や当時のヨーロッパの都市計画を踏襲したものと思われる。

a. 囲郭 (Palisade)・壘 (Fortification)

・濠 (Ditch) フランスの植民都市にとっての防御の対象はインディアンであり、カナダやアメリカのフランス植民地に脅威を与えるイギリスもまた念頭に置かれていた。1722年の Le Blond de la Tour による市の最初の正式の計画¹⁹⁾では、都市防御のための壘の必要性が提案され、1725年の図にその計画が描かれたが、1726年の J. P. Lassus の対岸からのスケッチ²⁰⁾には描かれていない。次いで1729年にニューオーリーonzにナッチェス・インディアン ((Natchez Indian) の反乱があった際、P. Baron²¹⁾によってレイアウトされた多くの複雑な稜堡 (Bastion) のある囲郭と、七つの壘が市域を楕円形にとりまく囲郭のシステムが提出された。結果的にはこれもまた執政官によって棄却された。その理由として、インディアンの反乱は既に鎮圧された後であり、工事のための黒人労働力が容易には得られないことがあげられている。

つぎに1760年に、カナダにおけるフランス人の地位がおびやかされ、ニューオーリーonzに危険がせまるとの報により、M. Deverge の計画²²⁾による防御壁を早急に施した。しかし、その計画は壮大であったが、実際の囲郭はきわめて簡略なものに終わっている。1763年には、カナダにおけるすべてのフランスの植民地やニューオーリーonz以外のミシシッピの東側のフランス植民地はイギリスに帰属した。

実際にハバナからの労働力の導入によって従

来のプランが実現したのは、1792年のスペインの統治下であった。その結果は、五つの壘 (セント・チャールズ、セント・ジャン、セント・フェルディナンド、セント・ブルゴーニュ、セント・ルイス) と、それを連結する囲郭が施された²³⁾。1803年の J. L. Boqueta de Woiseri の絵²⁴⁾でそれを確かめると、壘は土盛りを施した高みに簡素な兵舎が建てられたもので、ヨーロッパの各地に見られるような堅牢なものではなかった。

以上、壘や囲郭の建設はプランの上では長期にわたり検討されたものの、フランスにおける政情から植民地への投資力が不十分であり、簡素なものに終わっている。これは、ニューオーリーonzの地理的位置、地形の特性が囲郭以上に防御の役割を果たしていたものと考えられる。終局的には1803年のアメリカによるルイジアナ買収 (Louisiana Purchase) を機として、その後10年以内に、すべての囲郭や壘は不要のものとして消滅した。囲郭は Vieux Carre の境域を示すものとしての意義をもったにすぎなかった。

市民にとって必要な排水溝は、囲郭にそった濠 (Ditch) であった。これも、本来の目的は防御にあり、幅約18m、深さ1m足らずのものであったが、1730年の P. Baron の計画図²⁵⁾では、この濠はバイユー・セント・ジョン (Bayou St. John) の水路を通じてポンシャトレン湖に排水する機構を示している。ハリケーンや夏の降雨時、水浸しであった市域の排水はこの濠と水路の連結によって機能していたことは、後に紹介する1798年の地図 (図4) によって確認することができる。

b. 内部の機能配置 植民基地の都市機能の主要なものは、広場、行政機能 (行政府、事務局、監督局)、宗教機関 (教会、司祭館、修道院)、防御機能 (火薬庫、兵器庫、守備隊)、病院、牢屋、墓などである。1725年の地図 (図2) により初期の機能配置を見ると、これらの基本機能はほとんどが河港に臨んで配置されている。スペイン領となった後、1769年にスペイ

ンは3,000人の兵士をここに送り込んで、都市の基地的性格を強めた²⁶⁾が、1770年の地図(図3)においても、その機能配置には大きな差はない。この時期の地図には、居住地域に関する記載はほとんど認められない。

1731年から約30余年の間に、フランスのロシェール、ボルドー、仏領インドからの船は年平均11隻程度²⁷⁾にすぎず、スペインに移譲された後も、初期には自由貿易の成果があがらなかったために、都市の商業的機能はまだ十分には発達していない。

1700年代のリバーフロントでは、オープンマーケットが市民の食品を供給していた。物資流通の動脈はミシシッピーで、小型の船がイリノイの農産物や肉類、毛皮、鉱物をもたらし、帰

途にはルイジアナのタバコ、砂糖、綿が北に運ばれていた²⁸⁾。

広場は、ヨーロッパでは人間の結束の場、都市活動の中核となる場、マーケットの発生した場であった。そこに宮殿、行政府が立地する場合も多い。ニューオーリーonzの広場は方形で、市の中心部に位置している。その名称はフランス時代は“Place des Armes”，スペイン時代は“Plaza de Armes”であり、その名の示すとおり軍のパレードの場であって、基地としての機能を反映している。アメリカ領となってからは、広場は市民の集う公共広場へと、徐々にその機能を変え、その名は1856年に“Jackson Square”となった。現在では市民のための行事の場、緑地、観光商業の空間に転じている。

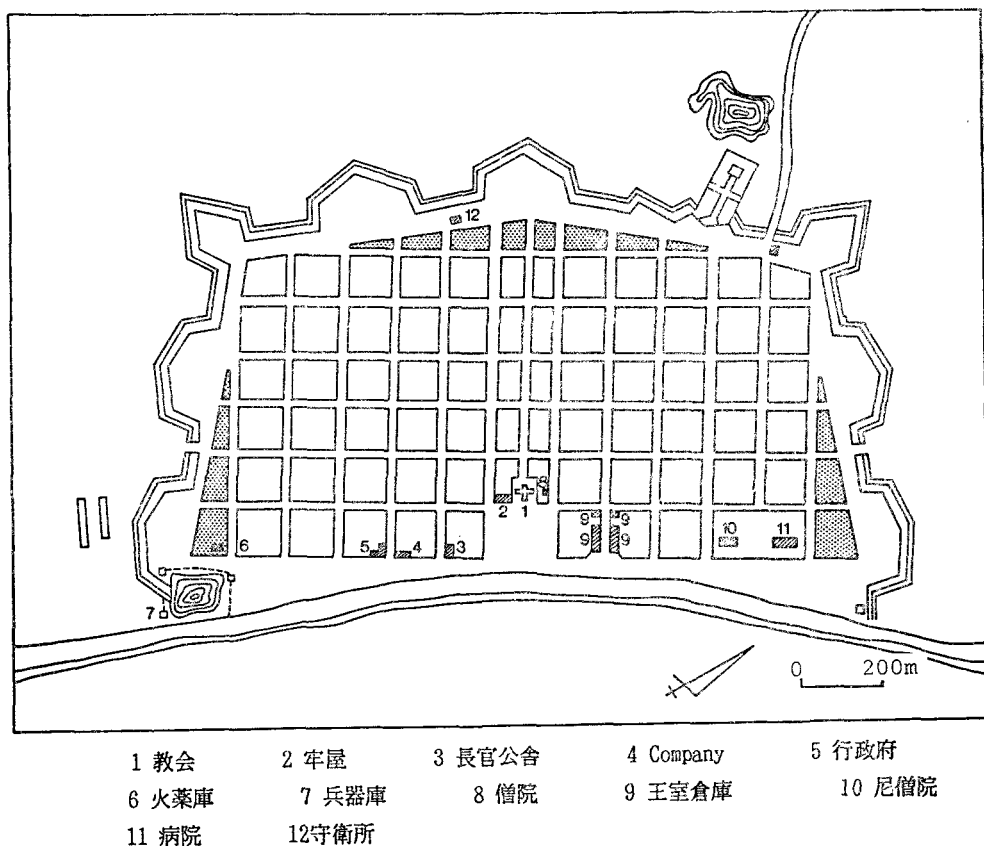
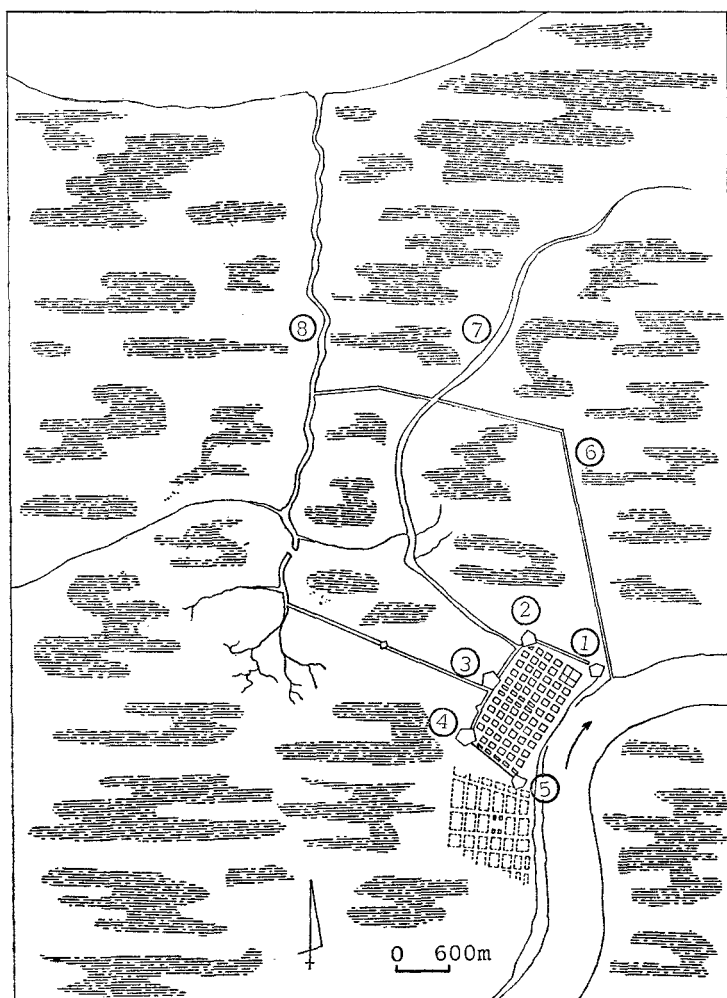


図3 ニューオーリーonzの機能配置(1770年)

資料: Cap. Pittman 図¹⁴⁾

行政府などの公的施設は、1725年の地図で見ると広場の両側に設けられ、1770年には一時そこからさらに川上に移った。1788年には、広場中央に教会と並んで建設されている。大火の後1795年スペインの行政庁（Cabildo）が再建され、その後フランスの行政庁（Maison de Ville）

に転じた。さらにアメリカの行政庁府（Town Hall）として使用されたが、一貫してその位置は中心広場にあった。後に述べるように、市に三つの自治行政区が存在した1836年から1852年まで、ここは第一自治行政区の庁舎として用いられた（現在は州立博物館）。



- | | |
|-----------------------|-----------------------------|
| 1 Fort St. Charles | 6 Saw Mill Canal of Marigny |
| 2 Fort St. John | 7 Bayou Gentilly |
| 3 Fort St. Ferdinand | 8 Bayou St. John |
| 4 Fort St. Bourgoigne | |
| 5 Fort St. Louis | |

図4 ニューオーリーズおよびその郊外（1798年）

資料：Plan of the City of New Orleans and the adjacent plantations by Carlos Trudeau, 1798.

現在“Presbytere”と呼ばれる建物は、1725年の地図では教会に付属する「司祭館」として、1770年の地図には僧院（Capucin）として示されているが、大火の後1813年にアメリカ政府により再建され、1853年以後40年にわたりルイジアナ地方裁判所として使用された（現在はルイジアナ州立博物館）。

教会²⁹⁾は初期には倉庫の一部に礼拝の場を設けたが、1724年頃には市の中心に立地した。フランス人は“Cathédrale de St. Louis”として、中心性のある宗教機関を公的機関の建物と並列させている。後に、民族別の教会が市域に分布するが、このカテドラルの位置は一貫して広場にあった。

病院は、1770年には尼僧院（Ursuline）に近いところに配置されている。病院の仕事は、フランスから渡来した修道女により分担されており、また孤児や女子教育施設も付設されている。

倉庫には、火薬庫、兵器庫、王室倉庫などがあるが、これらは中心広場から離れた河岸沿いに置かれ、港に近接の位置が選定されている。

墓は、1725年の地図では、中心から遠ざかった北部の境域内、セントピーター街の一部にあるが、その後の人口の増加に伴い、田郭の外側に移された。正式に墓地が定着するのは18世紀頃からで、田郭の外にセントルイスNo.1（1789年）、セントルイスNo.2（1823年）が付加されるようになってからである。

(3) 初期の基地開発会社

ここで初期のニューオーリーonzの植民地経営が、王室から委託された開発企業によって行われていたことに触れなければならない。カンパニー・オブ・ザ・ウェスト³⁰⁾の創始者 John Law は1716年、ルイジアナの経済の潜在力を認め、植民地開発に必要な物的資源と、労働力の効果的な回路を開くことを、フランス王との間に契約した。そして、基地のプラン、開発、行政の管理、防御、軍事などの事業のほか、商業、交易（ルイジアナの総合的な商業活動や、カナダ産のビーバーの交易）をおこなうために、

1717年 Company of the West（のちの Company of Indies）を創設した。

その資金源としては、Law 自身の開いた銀行の Banque Generale に依存していた。基地に必要な労働力は、カリブ海地域やアフリカ、また一部はヨーロッパからも導入した。

Law はカンパニー・オブ・セネガル（Company of Senegal）やカンパニーズ・オブ・ザ・イースト・インディーズ・アンド・オブ・チャイナ（Company of the East Indies and of China）などの企業体を買収した。1720年には、アルゼンチン貿易の権利やサントドミンゴとの交易権、さらにはアフリカ南部との交易権を独占するなど多角的に企業を統合し、ルイジアナおよびニューオーリーonzの植民基地の発展に寄与しようとした。

しかし、そのシステムはあくまでもフランスの代理事業であり、その運営は予期したほどの成果を得ることは困難となった。1719年のフランス対スペイン戦争の影響などもあり、この会社の事業の方向は次第に東洋貿易に傾き、1731年には、ルイジアナでの事業は不成功に終わり、その特権のすべてを喪っている。

その後、基地の運営はフランスの直轄とされた。短期間に、この会社が導入した各地からの労働力は、プランテーションの発達や、その後のニューオーリーonzの民族構成に、大きな影響を与えた。

IV. 民族の複合体 クレオール都市

——19世紀——

(1) 民族間のソーシャルミックス

ニューオーリーonzは、18～19世紀を通じて、フランス、スペインの統治時代に受容されたカリブ海域、アフリカからの多様な民族と、新しく渡来したヨーロッパ人との接触・同化が繰り返されて、民族的複合性を反映した文化景観をもつ「クレオール」の都市を形成した。

「クレオール（Creole）」³¹⁾とは何か。その定義は、時期により、人によって多岐である。一般にはフランス・スペイン領の新大陸生まれの

ヨーロッパ系白人をさすが、本来はスペイン語の Crillo (植民地生まれの子供の意) から来ている。後にこの語は、スペイン人、フランス人を先祖に持つニューオーリーズ生まれの人々をもさすようになり、伝統的なニューオーリーズに関わりのある人々のすべてをさすようになった。また、Vieux Carre 地域やその文化をも示す場合もあり、その表現する意味は多様である。

ニューオーリーズは19世紀初頭まで、アメリカの他の大都市に比べて、民族隔離が比較的緩やかな都市であったといわれている。多民族共存と融合が Vieux Carre の中で徐々に結実していったのは、その市街地の境域が長期間変化することがなかったことが大きい要因となった。さらに、この狭い境域の中で多民族の関心が一様に、異域からの不測の脅威と絶え間のない自然の脅威との二つの外圧にむけられてきたことによるものであろう。

つぎに、Vieux Carre の人口を構成した各民族の動向を概観することとする。基地が開かれる以前からここには、少数のインディアンが居住していた。フランスの基地建設の際には、インディアンは背後の水路を通じて物資の流通を行ない、マーケットを営んで新しい移民に便宜を与えていた。1729年には Natchez インディアンの反乱³²⁾があり、フランス人との間に流血の闘争があったが、地域に与えたインディアンの文化的な影響を無視することはできない。

初期の基地の主な建設者はカナダ生まれのフランス人であったが、カナダのニューブランズウィックやノヴァスコシア地方などで、イギリス人との対立に破れた人々が18世紀半ばにはルイジアナ地域に移った。その人々を Acadian と呼び、またこの地域では Cajuns とも呼ばれた³³⁾。

Cajuns については諸説があるが、従来 Cajuns はきわめて閉鎖的な人々で、都市の生活になじまず、自給自足の生活をルイジアナの湿地帯でおり、彼らの文化活動はほとんど凍結された状態であると説明されて来た。しかし、ごく最

近の L. E. Estaville³⁴⁾の研究では、従来の通説を否定するような内容が報告されている。

それによれば、たしかに都市生活からは遠ざかった人々ではあったが、彼らは狩猟や漁業に徹したグループではなく、主として農業を生業とし、米作においては北ルイジアナに入植したイギリス系農民よりも進歩した技術を持っていた。また、18世紀に John Law によってヨーロッパから導入されたドイツ人労働者とも早くから積極的に交流し、同化させた。40年間支配を続けたスペイン人との同化も進み、その間に、ルイジアナの都市の発展にも影響を及ぼしている。19世紀のアングロサクソンのルイジアナ進出にともない、Cajuns は子供たちを社会化させたことなどが実証されている。なかでも彼らはミシシッピ下流域のデルタ地帯の水路 (Bayou) を利用して、他との連携を求めた。デルタの水路は鉄道よりも細かく派生した交通路であり、それを利用した Cajuns は、決して地域に閉じこもっていた人々ではないと Estaville は述べている。

18世紀における黒人³⁵⁾は、初期には基地建設、ついでプランテーションの労働力として導入されたが、大規模な黒人労働力の導入は Company of the West の手によって行なわれた。カリブ海域からニューオーリーズに導入された黒人は、既に他との同化を経験し、民族的な複合性をもっていたものも多いと考えられる。1800年代には西インド、サントドミンゴに暴動が起り、多くの黒人がニューオーリーズに流入しているが、この場合にも Vieux Carre の先住者たちは、黒人の受け入れに寛容であった。

18世紀末の Vieux Carre は、黒人人口が全体の50%を占める都市であった。19世紀初頭には Vieux Carre の境域をこえて、新しい郊外のアメロ都市にも急速に黒人の分布が拡大している。そして、その場合にも黒人は、大きい街路 (boulevards) に沿って住む白人の邸の背後の細い道に面したところに住んでいた。

黒人は小さいクラスターをつくって住んだが、

市街地にいくつもの小核心地をつくって分散的に住み、他の民族との間に明確な境界をつくることはなかった。この点では、北部の巨大都市における黒人街の構造とは違っていた。しかし、後に述べる郊外化、港湾機構の拡大と経済の発展にともない、黒人のゲットー (Ghetto) が特殊な地形の地区に形成されるようになり、際立った居住隔離が進行した。

ニューオーリーズは、ニカラグア、ホンジュラス、グアテマラなどからの移民センターにたとえられるほどで、中南米のラテンアメリカとは密接なかかわり合いがあった。それは熱帯プランテーションのおびただしい生産物がニューオーリーズに送られ、多くの商社や労働力が集まるようになったからである。スペイン系移民とフランス系移民との同化は早い時期から徐々に進行していて、ニューヨークのプエルトリコ人移民や、マイアミにおけるキューバ人のように急激な流入が行なわれなかったために、都市の中での特定の民族の際立った隔離現象はおこらなかった³⁶⁾。それは、40年間のスペイン統治期間はもとより、その後の長い年月をかけてゆるやかにこの市の構造に適応し、他の民族との同化が進んだからである。Vieux Carre は、ラテンアメリカ社会の移植にきわめて好適な場

であり、政治的亡命者をも包含するような民族間の寛容が認められる場であった。

南北戦争 (1861~65) 以前、ヨーロッパから

表1 ニューオーリーズの外国生まれの白人人口
(1910年)

国 名	人 数
イ タ リ ア	8,066
ド イ ツ	6,115
フ ラ ン ス	3,640
アイルランド	2,993
イ ギ リ ス	1,337
ロ シ ア	1,254
オーストリア	645
カ ナ ダ	475
ス ペ イ ン	448
メ キ シ コ	275
キューバ、西インド諸島	265
スコットランド	257
ス イ ス	246
ト ル コ	238
ノ ル ウ ェ ー	180
そ の 他	1,252
合 計	27,686

資料 : Statistics of the Population of the U. S., Washington, Government Printing Office, 1913.

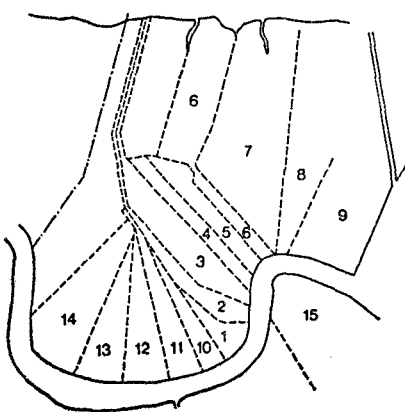
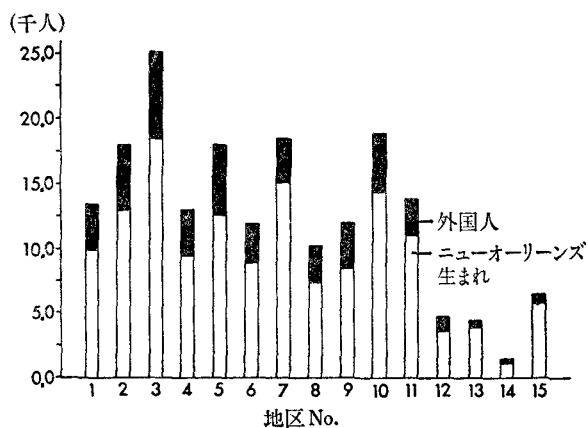


図5 ニューオーリーズの地区別人口 (1870年)

資料 : Statistics of the Population of the U. S., Washington, Government Printing Office, 1872.

の移民の主流は、フランス、ドイツ、アイルランド人であって、19世紀末に増え始めた東欧からの移民の受容はここではほとんどなかった。ドイツ人は早くから農業に従事したが、20世紀初頭でも表1に示すようにドイツ人の流入が続いた。彼らはクレオールとは分離し、旧市の東の郊外に居住し、その社会経済的地位は低かった。アイルランド人は、綿花取引と甘蔗の交易の全盛期に当たる1820～40年、多数が流入している。彼らはアイリッシュ・カソリック³⁷⁾の教会を背景として、エスニック社会を形成した。

地中海域からの移民のうち、ギリシャ人は19世紀半ば頃までに既に定着して、彼らの信奉するギリシャ正教寺院を持ち、ダルマチア人は1850年代にここに移民し、ミシシッピーデルタの牡蠣^{かき}の養殖に従事した。

地中海域からの最大の移民グループはシンシリー人であった。彼らは1850年代までにニューオーリーonzでの基地を築いている。彼らの活動は、果実の取引に集中した。1870年代にシンシリーからさらに専門的な果実労働者を雇い、南・西ルイジアナの甘蔗栽培者として独立した事業を展開した。1920年までに、市の果実店舗の約半数はシンシリー人によって占められた。彼らは季節的労働者を含めれば、1890年から1910年に5万人以上が入植している³⁸⁾。以上のような多くの民族の動きに対して、19世紀初頭まで Vieux Carre にはアングロアメリカ人の居住がきわめて少ないのが特徴であった。

Logsdon や Hardy³⁹⁾ の表現を要約すれば、ニューオーリーonzでは、白人と黒人との間にユニークな社会的な相互関係が生まれ、フランス人とスペイン人との間には、他のアングロアメリカ系都市における現象とは異なる、文化の接触、融合のモデルが形成された。その過程は決して静かではなく、市中に住む多くの民族の変化に富んだ要素は、互いに激しい接触の動きの中で同化と混合をくり返した。ここで、複合されて生まれた言語、習慣、社会組織は、いずれも「クレオール」の名によって統合されるものである。

(2) クレオール都市の構造

Vieux Carre がクレ奥ールの民族的・文化的アイデンティティーを明瞭に意識したのは、アメリカのルイジアナ買収後、それまであまり接触のなかったアングロアメリカ人の流入が始まった時である。自らをクレオールと自負するあまり、彼らの伝統と異なるアングロアメリカ人を異国の人とみなすことから、後に述べるような居住地の分化、行政区の分化という地域的現象をひきおこすようになった。1810年頃から40年代にかけて、ニューオーリーonzは経済的黃金時代⁴⁰⁾を迎えた。ヨーロッパや南米からの船舶がコーヒー、砂糖、バナナ、穀物の交易のために集まり、南下するアメリカ人の急増により、1870年代には市の人口は20万をこえるようになり、アメリカ第二の都市に成長した。

19世紀のクレ奥ールの景観をつくる建築様式を分類した R. A. Sauder⁴¹⁾ は、その家屋の特性から、旧市には17世紀末から1830年頃までに、「クレオールコテージ」「クレオールタウンハウス」というこの地域独自に発達した様式があることを指摘している。Vieux Carre の周辺は、それらとは異なるアメリカやイタリアなどの様式を導入した家屋が多く、旧市との間に景観上の地帯分化がみられる。

ここでは19世紀の Vieux Carre の都市機能の配置(図6)から、クレ奥ールの特性を見いだすこととする。

公的機能の配置を見ると、既に基地時代の囲郭等の防御施設の重要性は失われ⁴²⁾、行政機能が中枢となっている。1803年にアメリカ領となった後も、市庁舎は広場の Cabildo に置かれ中枢的地位を保っているが、郵便局やニューオーリーonzの裁判所はアメリカ都市に近いほうに立地している。さらに貿易などの手続きに重要な税関(Custom House)は、アメリカ都市との境界にのぞむキャナル街の港に接したあたりに1848年に新しく建設され、そこを中心に事務所、倉庫などの立地がさかんとなっている。

商業機能の中では、経済の中核機能としての商人の会所(Merchant Exchange)、銀行のほ



- | | |
|---------------------------------------|-------------------------------------|
| 1) Merchant Exchange (1840) | 9) Laficadio Hearn's Room (1870's) |
| 2) Customs House (1848) | 10) St. Louis Exchange Hotel (1840) |
| 3) Planter's Bank (1800) | 11) Preservation Hall (19c.) |
| 4) Bank of Louisiana (1826) | 12) First Skyscraper (1811) |
| 5) Louisiana State Bank (1812) | 13) The Little Theater (1789) |
| 6) New Orleans Courts Building (1910) | 14) Orleans Ball Room (1817) |
| 7) Maspero's Exchange (1788) | 15) The First Cabild (1769) |
| 8) French Opera House (1859) | 16) The Presbytere (1793) |
| | 17) The French Market (1813) |

図6 19世紀の都市機能配置と建物の建築年次

か、クレオール民俗性を反映する歓楽機能および、市が管理したパブリック・マーケットの配置を検討する。商人の会所は一般にエリート商人が集まり、取引の談合などを行なう場で、イギリスのリバプールなどの例では市の行政機能と同じ建物に置かれていたが、これは都市行政に商人の参画が多かったためである。

ニューオーリーズでは典型的な商人会所として、図6に示したマーチャント・エクスチェンジやマスペロのエクスチェンジがあり、またホテルもそれに利用された。セントルイス・エ

クスチェンジ・ホテルなどは、プランテーションの経営者、兵士、商人や、時には他国からの亡命者などの集まる非階層的な会所であり、綿や甘蔗などの取引から政治についてまでの、自由な談合の行なわれる所であった。また、そこでは奴隷取引まで行なわれていた。マーチャント・エクスチェンジの建物が1856年にギャンブルハウスに転化していくなど、多数の船の出入りとともに、ここでは基地時代の厳格さにかかわって、変化に富む人種と階層を反映する景観が生まれた。

銀行は、ロイヤル街の一角に集中し、金融のセンターを形成している。これを核として、19世紀のロイヤル街は金融・保険などの集積とともに小売業が増加し、Vieux Carreの中心商業地に発展している。しかしいずれも中心より川上にむけて立地する傾向があるのは、新しいアメリカ都市の吸引力がきわめて強いことを示すものである。これらの銀行はいずれも著名な建築家によって建てられたものが多く、クレオールスタイルやグレコローマン様式の装飾が施されている。

一般にどの港市にも歓楽機能が発達しているが、ニューオーリーズでクレ奥ールの特色のあるものに、劇場、ダンスホール、バー、レストラン、その他の遊戯場などがある。それらは商人や地域の人々の商業上の社交の場にも利用された。そこに生まれた演劇、芸術、音楽活動やそれらに付随する風俗、食物にいたるまでが、ニューオーリーズの都市を風土的・民俗的に特色あるものにした。ジャズ音楽は西アフリカの黒人の詠唱歌が基本となり、楽器や様式にカリブ海地域の原住民の影響もあるもので、スペインやフランス系の非ビュリタングループによって自由に受容され、融合したものと いわれる。ここにはバンド行進、サーカス、マジック、ビリヤードなど多民族による幾種かの活動が現在にいたるまで継承され、この町の主要な景観要素となっている。

また、この歓楽機能の発達は、初期の移民グループが祭りを重視したことに根ざしている。この町最大の行事となっている謝肉祭の行事のマルディグラ (Mardi Gras) に関連する施設が、広場や教会に近いところに集中した。図6に示した19世紀初頭からのオペラハウスやボールルームなどの位置で、それを確めることができる。スペイン風の小劇場 (The Little Theater) は有志の人々によって建てられ、演じられた劇場でアメリカでもっとも古い起源をもつものの一つである。ダンス場のオーリーズ・ボール・ルーム (Orleans Ball Room) では南北戦争以前に多くの華麗な舞踏会が催された。

1881年には、この建物は黒人の慈善家によって買い取られ、カソリックの黒人修道女のために使われるなど変化も多い。

これらの歓楽機能は、南北戦争によって大きい打撃をあたえられて衰退したが、その後もまた広場をとりまいて、機能が再配置された。その一つとして、現在も古典ジャズの保存の行なわれているプリザーベーションホール (Preservation Hall) をはじめとして、ジャズ・ショー・プレースが多い。

以上のようなクレオール都市の魅力を芸術の温床とした作家や芸術家、画家たちが集まったことも、興味ある問題である。

パブリックマーケットは、市民に日常の肉・野菜・果実・魚および日用品を供給するために法で規定された公共マーケットで、18世紀に発生している。フランスの中心的なマーケットの伝統を導入したもので、食品の質、価格の適正と衛生を市がよく管理している。その位置は、公共広場からアクセスのよい堤防と市域の間の空間に位置している。ハリケーンによる破壊のあと、1813年に再建したものを基本に次第に拡大した。ニューオーリーズ全域に1784~1911年の間に34のパブリックマーケットが建てられたが、Vieux Carreの「フレンチ・マーケット」は、食品の種類の豊富さと生産地の多様さにおいて、クレオール食品の展示場にたとえられる。

以上のような商業機能の配置は、19世紀に既に中心広場より川上地域 (西より) に重心が移り、植民基地の時期のシンメトリックな機能配置のバランスを崩した。川上のアメリカ地区の中心的機能の吸引力の強さを示すものである。

V. 郊外化と地域分化現象——19世紀——

(1) 地域分化の触発要因と郊外化

外国人居留地のあった都市における地域分化現象として、民族によるセグリゲーションがおこっている。その現象は、政治的な外部要因によってひきおこされる場合が大部分である。

17世紀にイギリス商人の商館が河岸の自然堤

防に設けられ発達したカルカッタの例⁴³⁾では、19世紀半ばに基地の周辺にインド人が集中して外延地帯を形成し、イギリス人地区の内部地帯に対応して、その間の空間に中間地帯を生じている。ハンザの都市ベルゲン⁴⁴⁾では、在来国の既成市街地に割り込む形でドイツ人地区が形成され、在来都市のなかに新しい核を生じ、そこにあった在来の機能が他へと押し出された。19世紀の上海⁴⁵⁾の例では、伝統的旧市の囲郭の外に、それとは全く別の外国人の貿易業務地区を含む新市「租界」が形成され、その中でいくつかの国籍別のサブエリアが形成された。旧市はそのまま存続して複核都市を形成した。

この三つのパターンに対して、ニューオーリーonzの場合を検討する。ニューオーリーonzの地域分化の直接の触発要因は、1803年のルイジアナ買収という政治的な変化である。同時にこの都市の経済の地位が高まり、1870年に人口が約20万に達するようになると、商業の集積と機能の再配置がおこり、都市のエコロジカルな動きによって、港湾都市の新しい CBD の機能の形成が始まった。その機能の集積は、もはや伝統的な旧市にむけてでなく、旧市の郊外の新しい空間にむけられた。

1798年の地図(図4)をみると、スペイン領末期のニューオーリーonzは、後背地は未だ深い湿地にとり囲まれ、囲郭の中の限定された都市であったが、市の川上部分に新しい郊外都市のプランが示されている。本格的な郊外開発は、囲郭の廃止、プランテーション農地の買収⁴⁶⁾、排水機構の整備によって進行した。おびただしいアングロアメリカ人と移民を受容するには、既に旧市は人口過剰であった。一方、旧市のクレオールたちは伝統的な都市に固執し、アングロアメリカ人を全く異国の人として認識した。

開発の対象地となった郊外の一部では、既に黒人労働力と経営者による甘蔗や大豆のプランテーションの土地利用がおこなわれていた。1805年にはエスプラネード街の外のバーナード・マリグニー (Bernard de Marigny) のプランテーションが買収された。また、旧市の境界

となるキャナル街 (Canal Street) から川上では、セントメリーと呼ばれる郊外 (Faubourg St. Mary) の買収が進行した。この川上地域には、アメリカの企業家たちが競って集中している。その理由は、旧市の川下の郊外では、新しい参入者に対するクレオールの強力な拒否があったためである。

(2) 三つの自治行政区とサブエリア

クレオールとアングロアメリカの対立は、ついに1836年に三つの自治行政区の分化⁴⁷⁾という行政的な措置を決定させた。その結果、第一自治行政区はクレオールの集中する旧市と周辺、第二区は川上 (Uptown) の郊外 (Faubourg St. Mary)、第三区は川下 (Downtown) の郊外 (Faubourg Marigny) に分割された(図7)。

三つの自治区はそれぞれ市庁舎を持ったが、なかでも旧市(クレオール都市)と川上のアメリカ人の多い新市の両者は、きわ立った対立を示した。アメリカ都市は、旧市のジャクソン広場に対してラファイエット (Lafayette) 広場をつくり、旧市商業地区ロイヤル街に対してセントチャールズ (St. Charles) 街をつくった。19

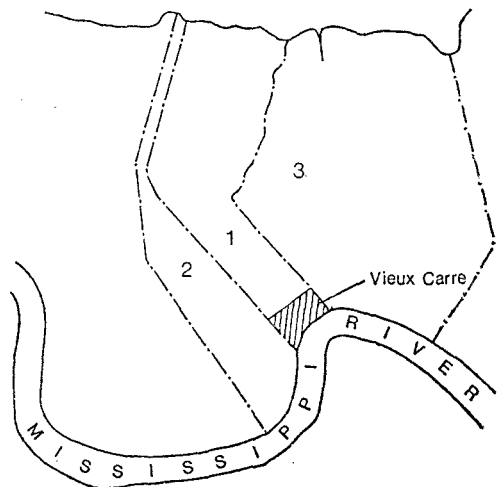


図7 ニューオーリーonzの三自治行政区 (1836年)

資料: 'Ward of New Orleans' Bureau of Governmental Research, New Orleans, March, 1961.

世紀には、この主要道路を中心にプロテスタントの教会が配置され、旧市のカソリック教会とは様式を異にした。さらに教育施設・小劇場まで設けて、自治行政区の自主性を示した。排水路は、旧市の背後のキャロンドレ運河に対抗して、独自のニューベースン運河まで開発した。

これに対して第三自治区は、旧市の人口圧により押し出されたクレオールや、新しい移民の混じり合う居住区を形成し、社会経済的地位の低いヨーロッパ系移民の多くが居住した。

この自治行政区の三分化もさることながら、さらに深刻な居住地の分離現象⁴⁸⁾がおこった。経済的地位、民族グループ、宗教や文化などの差異によって生まれたサブエリアには、次のよ

うなものがある。①ガーデン・ディストリクト (Garden District)、②アイリッシュ・チャネル (Irish Channel)、③スワンプ・ゲッター (Swamp Ghetto)、④バチュール・ゲッター (Batture Ghetto)、などである。

① ガーデン・ディストリクトは、主としてアングロアメリカ人のプランテーションや船舶の所有者、貿易業者、役人などの富裕な階層の居住区である。建築様式は旧市と異なって、広い前庭を持つグreek・リバイバル (Greek Revival) の低層の家屋が立地し、特色のある重厚な装飾を持つ家が多い⁴⁹⁾。自然堤防上に位置し、河岸から約 2 km 内側に河流に平行に走る主要道路沿いの自然災害に対して安全性の高

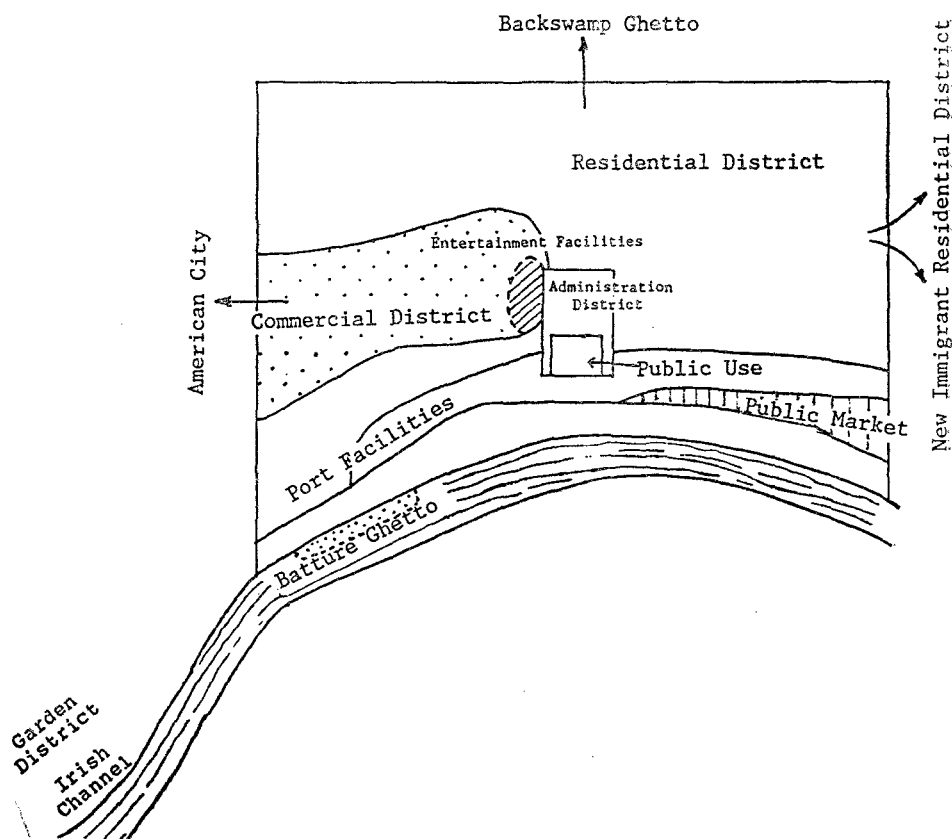


図8 19世紀のニューオーリーズンの都市構造モデル

参考資料 : Lewis, P. F. : 'New Orleans-The Making of an Urban Landscape'
: Ballinger Publishing Co., 1976, p. 91.

Total: 339,075

A (43.5%)	B (21.9%)	C (8.2%)	D (26.3%)
--------------	--------------	-------------	--------------

A) Native Parentage C) Foreign Born
B) Foreign or Mixed Parentage D) Negro

図9 ニューオーリーonzの人口構成 (1910年)

資料: Statistics of the Population of the U. S., Washington, Government
Printing Office, 1913.

い地帯である。

② アイリッシュ・チャネルには、1820年頃から60年頃にかけて急増したアイルランドからの移民の一部が居住した。この新来の移民たちは、港湾を中心とした危険な工事に従事し、命を落とすこともしばしばあった。そのため、多くの孤児のための収容所がアイルランド人⁵⁰⁾によって設けられたほどである。河岸の人工堤防に接し、河にむけての視野を遮断され、排水の不良な小地域であった。ここの土地と家屋の多くは、ガーデン・ディストリクトの資本家たちの所有であった。

③ スワンプ・ゲッターのある背後の湿地帯の水路の周辺は、辛うじて水面より高いところであったが、しばしば冠水があるため、居住地として不適切であった。しかし、土地の価格が低かったため、最も経済的地位の低い黒人が、蚊の害、風土病、氾濫の多い排水機構など不備な環境の中に分散して居住し、ゲッターを形成した。

④ パチュール・ゲッターの「パチュール」は、フランス語で礁を意味する。ニューオーリーonzでは、ミシシッピの人工堤の外側の河流に洗われる岸辺に生じた、わずかの空間をさしている。ここは、時期によっては船の繫留の場となり、また埠頭としても用いられた。最も経済力の低い人々が、そこを一時的な居住の場としたが、誰の所有にも属さない地域であった。

以上のような地域的変化が顕在化したのは、Vieux Garre をとり囲んで郊外開発が進行しは

じめたころからであった。排水のよい健康的な環境の自然堤防と水路ぞいの高みに、経済力のある白人が居住地を見出し、危険性の多い地区や自然的基盤の改良されていない地域に、移民や黒人がその居住地を選択せざるを得ない状況は、当時の社会的背景と密接な関連性がある。

居住地域が拡大しても、社会経済的地位の格差が増大し、交通費や地代の支払い能力などによって居住地の選択に制限が加わり、その結果として以上のような地域分化がおこったものと考えられる。その後もこの地域的差異は容易には変化しないことは、土地価格と居住者のライフスタイルなどから実証することができる⁵¹⁾。

VI. 歴史的核心地の存続

行政上の三つの自治行政区の分化は、約半世紀の後、1852年に自治区統一が成った時期で終了した。しかし、この三地区の特性は、歴史的慣性として地域に生き続けている。

現在のニューオーリーonzの「都市核心部」は、歴史的核心地とCBDコアから構成される。前者は市の統計区では Vieux Carre (13B区) として分類されて、その伝統的境域を保持し、三階以下の低層家屋が92%を占める⁵²⁾。CBDコアとは、かつての第二自治行政区の核心であり、アメリカ都市のパターンをもつ高層のビジネス地区と行政区・広場とから構成されている。二つの地区は互いに機能を補完し合い、中心市街地の心臓部として鼓動している。

Vieux Carre は20世紀初めに衰退のきざしが

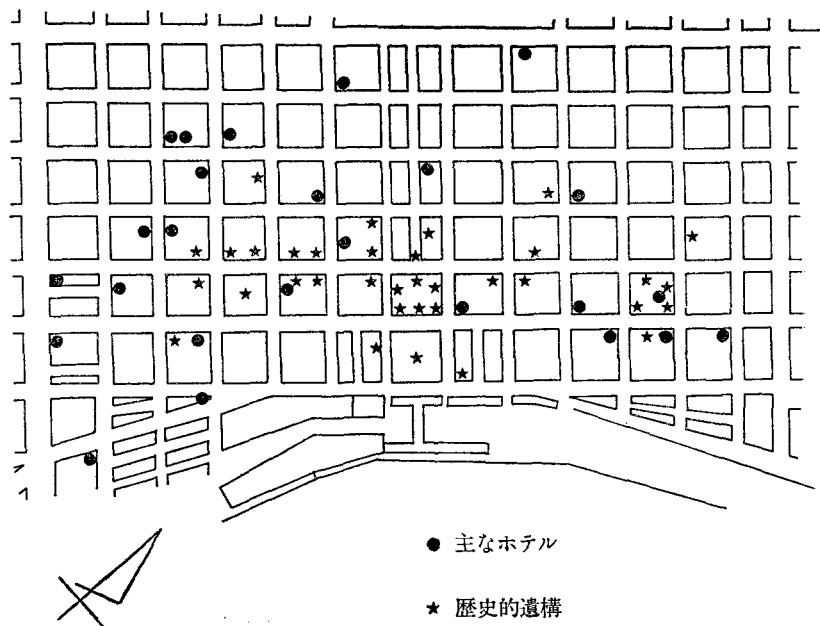


図10 歴史的遺構とホテルの分布 (1988年)

資料: Greater New Orleans Tourist Convention Commission. 1986, 等

見られたが、その頃から、フランス・スペイン時代の歴史的遺構とクレオール文化の万華鏡としての価値が見直されるようになった⁵⁴⁾。1920年、あらゆる衰退現象から旧市を守ろうとする有志の動きにより Vieux Carre Association が設立され、さらに1938年には、建物保全の目的を持つ Vieux Carre Commission が市の推進母体として設置された。強力な資金が寄せられ、Bureau of Governmental Research によって歴史核の細密な調査研究⁵⁴⁾が推進され、その成果が報告されている。

1899年以前の建物が90%以上を占めるブロックは、河岸に臨むブロックと中央より西寄り(川上)に偏しているが、1986年時の歴史的建造物および主要ホテルの分布図(図10)を作製してみると、中心部より東寄りの川上にもホテルが拡大立地している。観光や見学のための来訪者がこのクレオールの都市に滞在し、有形無形の文化財に接する状況を知ることができよう。ニューオーリーンの歴史核は、変化の激しい

アメリカの都市中心部の中でも、きわめて活力のある、クレオール文化を継承する地域として存続している。

VII. むすび

港湾都市における多民族居住が都市形成とその構造に与える影響を確かめるために、ニューオーリーンの歴史的核地の事例研究を展開した。

1718年にフランスによって植民基地が設定された Vieux Carre は、1803年アメリカ統治が始まるまで、フランス、スペイン、フランスと統治国が変化し、その間、アフリカ、ラテンアメリカおよびヨーロッパからの人口流入が進んだ。歴史的核地は人間の居住に不利な自然環境であったが、初期には植民基地として、19世紀にはアメリカ第二の港湾都市として発展した。

この18～19世紀にわたる Vieux Carre の研究にあたり、次の3点に焦点をあてた。

(1) 18世紀のフランス、スペインの統治時代

における植民基地の自然環境と、都市の形成および構造の特色

(2) 19世紀を中心に発展した港湾都市における民族の動向と、民族や文化の複合性が都市形成に与えた影響

(3) 1803年アメリカ領となった時期の都市域拡大と地域の変化

以上の研究にあたり、歴史的な地図資料と文献資料を重視し、主として都市構造の変化による地域の解明を行なった。

結果は次のように要約される。

1) 植民基地 Vieux Carre

基地は広大な湿地上に形成された自然堤防に設定された。ヨーロッパやフランス植民地などで用いられた方格条里プランが適用されている。地盤の軟弱と沈下、河による浸食、ハリケーン、蚊、病気などの不利な条件の中で、基地としての基本的機能配置が行なわれた。行政機能と教会が中心広場に位置し、河岸に面して防御施設、倉庫、病院がシンメトリックに配置されている。基地運営事業を委託された Company of the West は、短期間に崩壊したが、アフリカ、カリブ海域、ドイツからの労働力を導入し、その後の Vieux Carre の民族構成、プランテーションの発展に影響を与えている。

2) クレオール都市

Vieux Carreでは、多民族の共存による同化と融合が長期にわたってゆるやかに進行し、複合民族によるクレオールの都市が形成された。19世紀を中心にその都市構造を観察すると、もはや基地的特性はうすれ、行政機能が広場を中心に存続し、ニューオーリーズ特有の商業機能配置が見られる。経済の発展とともに、金融、貿易機能は郊外都市の成長にひかれて、アメリカ都市に近い西に偏して集積している。商業機能の中で多民族の文化をもっともよく反映している歓楽機能は、主として広場の周辺に集中するが、19世紀に既に現在の中心商業地ロイヤル街に商業機能の集積が目立つ。

3) 地域分化現象

1803年のルイジアナ買収後、排水施設の進歩

とともに郊外化と都市拡大が進み、多くのアメリカ人が流入した。行政上 Vieux Carre とアメリカ都市、移民の都市の三地域が生まれたが、民族、社会経済的地位による居住地のセグレーションが顕在化した。経済的地位の低い人々は、自然環境の不利な地域への居住を余儀なくされ、アメリカ大都市に特有のエコロジカルな都市の変化をおこしている。

4) Vieux Carre の存続

Vieux Carre はクレオール文化と遺構の保全によって存続し、アメリカ都市のCBDを補完する中心市街地の商業地域としての機能を分担している。

(立命館大学非常勤)

〔注〕

- 1) 歴史的核心地の定義は藤岡謙二郎の説に従った。藤岡謙二郎『日本の都市その特質と地域的問題点』大明堂、1975、14頁など
- 2) Wagner, F. W.: 'Development Problems in the New Orleans Coastal Zone' (Kesel, R. H. & Sauder, R. A. (ed.)): *A Field Guidebook for Louisiana. National Meeting of the AAG*. AAG. 1978, pp. 124~127.
- 3) Lewis, P. F.: 'New Orleans-The Making of an Urban Landscape': Ballinger Publishing Company. 1976.
- 4) 山口平四郎『港湾の地理』大明堂、1980、282~290頁
- 5) 野沢秀樹「都市と港湾—都市地理学視点から」人文地理、30-5、1978、45~62頁
- 6) 藤岡ひろ子『神戸の中心市街地』大明堂、1982
- 7) 前掲 6)、173~195頁
- 8) 藤岡ひろ子「中世ヴィズビーとベルゲンのドイツ人居留地」歴史地理学、146、1989、1~19頁
- 9) 前掲 6)、195~213頁
- 10) 前掲 3)、pp. 17-30.
- 11) Chamber, D.: 'Louisiana's Marsh-Builders Work to Save Shrinking Coast': *The Columbus Dispatch*, Oct. 5, 1986.
- 12) 前掲 2)、p. 125.
- 13) 前掲 2)、p. 124.
- 14) Wilson, S. Jr.: 'The Vieux Carre, New

- Orleans, Its Plan, Its Growth, Its Architecture* : Historic District Demonstration Study, Conducted by Bureau of Governmental Research, 1968, p. 27.
- 15) 中央広場のロットは、南北道路によって、さらに二分割されている。
- 16) 飯塚キヨ『植民都市の空間形成』大明堂, 1985, 155頁
- 17) 前掲 16), 156頁
- 18) Carter, H. : '*An Introduction to Urban Historical Geography*' Edward Arnold Ltd., 1983, pp. 119~122.
- 19) 前掲 14), p. 12.
- 20) 前掲 14), p. 20.
- 21) 前掲 14), p. 27.
- 22) 前掲 14), pp. 37~39.
- 23) 前掲 14), pp. 46~54.
- 24) 前掲 14), p. 55.
- 25) 前掲 14), p. 27.
- 26) '*Vignette of New Orleans*' (Fel, T. & Fel, A. (ed.) : Vignette Publications Inc., 1987, p. 10.
- 27) Clark, J. G. : '*New Orleans 1718~1812, An Economic History*' : Louisiana University Press, 1970, Table 3. pp. 81~82.
- 28) Kniffen, F. B. : '*Louisiana, Its Land and People*' : Louisiana State University Press, 1974, pp. 125~126.
- 29) Huber, L. V. & Wilson, S. W. : '*Basilica on Jackson Square, The History of the St. Louis Cathedral and its Predecessors, 1727~1965*' : A. F. Laborde & Sons, 1972, pp. 5~44.
- 30) 前掲 27), pp. 9~20.
- 31) 前掲 3), p. 3.
- 32) 前掲 14), pp. 26~27.
- 33) 前掲 3), pp. 11~12.
- 34) Estaville, L. E. Jr. : 'The Louisiana French in 1900' *Journal of Historical Geography*, 14-4, 1988, pp. 342~359.
- 35) 前掲 3), pp. 44~48.
- 36) 前掲 3), p. 51.
- 37) Niehaus E. F. : '*The Irish in New Orleans, 1800-1860*' : Louisiana State University Press, 1965, pp. 98~111.
- 38) Greenbaum, R. (ed.) : '*New Orleans : Gateway on the Mississippi*' : New Orleans Port Record, Oct. 1986, pp. 32~35.
- 39) 前掲 38), p. 35.
- 40) 前掲 3), p. 37.
- 41) Sauder, R. A. : '*Architecture and Urban Growth in Nineteenth Century New Orleans*' : *Southeastern Geographer*, 17-2, 1977, pp. 93~107.
- 42) 前掲 3), p. 24.
- 43) Sinha, P. : '*Calcutta in Urban History*' Firma Klm Private Ltd., 1978, pp. 3~61.
- 44) Dollinger, P. : '*The German Hansa*' (Ault, D. S. & Steinberg, S. H. (tr. & ed.) : Stanford University Press, 1971, pp. 101~102.
- 45) White III, L. T. : '*Non-Governmentalism in the Historical Development of Modern Shanghai*' (Ma, L. J. C. & Hanten, E. W. (ed.)) : *Urban Development in Modern China*, Westview Press, Inc., 1981.
- 46) 前掲 14), p. 60.
- 47) 前掲 14), p. 85.
- 48) 前掲 3), pp. 44~46.
- 49) 前掲 41), pp. 99~101.
- 50) St. Mary's Boys Asylum, New Orleans Female Orphan Asylum, などの施設があった。Margaret Haughey は、生涯を孤児たちのために捧げた。前掲 37), p. 101.
- 51) 藤岡ひろ子「ニューオーリーンの都市構造と核心地区」兵庫地理, 32, 1987, 30~39頁
- 52) 'Technical Report, Vieux Carre Historic District Demonstration Study, Environmental Survey' (conducted by Bureau of Governmental Research), 1968, p. 21.
- 53) Sauder, R. A. & Wilkinson, T. : 'Preservation Planning and Geographic Change in New Orleans' Vieux Carre' : *Urban Geography*, 1989, 10-1, pp. 41~61.
- 54) 前掲 52), pp. 1~81.

〔付記〕

この小論は 歴史地理 学会 1990 年度大会 (金沢大

学)において報告したものに、補正・加筆したものである。研究にあたり、ニューオーリーゼのワールドの巡検をともにして頂き、一方ならぬお世話になりました中川正先生(現在筑波大学、1986年当時ルイジアナ州立大学博士課程)に心よりの謝意を表します。また、古地図や統計などの資料収集にあた

り、ニューオーリーゼ大学の Robert A. Sauder 教授のお導きを頂きました。心よりのお礼を申し上げます。さらに京都教育大学(1990年当時立命館大学)の香川貴志先生の御力添えに対して厚くお礼を申し上げます。

VIEUX CARRE : THE HISTORICAL URBAN CORE OF NEW ORLEANS

Hiroko FUJIOKA

The objective of the paper is to examine the effect of multi-racial habitation on the structure and development of a section of a port city. The Vieux Carre of New Orleans began when France initiated colonial settlement at New Orleans in 1718. Thereafter the colony changed hands between France, Spain and France again, before finally passing to the United States in 1803. During this period the city was populated by peoples from Africa, Latin America, and Europe. In spite of an unfavourable environment, the city's strategic location and port function permitted it to grow steadily and during a period in the nineteenth century it was the second largest trading port in the United States.

Using contemporary maps and writings the eighteenth and nineteenth century development of the Vieux Carre section is examined by focusing on three forces: the natural environmental controls on colonial settlement and urban structure; the ethnic and racial complexity and behaviour in the building of the city; the impact of change to American control after 1803.

Located on the natural levee adjacent to a broad swamp, the French authorities imposed a European inspired grid plan as the basis of the settlement. Occupants soon found themselves facing many natural hazards: sinking foundations, riverine erosion, hurricanes, mosquitos and epidemic diseases. Nevertheless settlement persisted and work began on locating administrative and ecclesiastical facilities round a central plaza while defensive installations, warehouses and a hospital were situated symmetrically on the river bank. Operation of the settlement was given by the King of France to the Company of the West, but the firm soon went bankrupt. However in its short administration, the Company introduced a vital labour supply drawn from Africa, the Caribbean region and from Germany thereby exerting a lasting impact on the social and racial mix of the city. The coexistence of several races resulted in the gradual assimilation and amalgamation of these diverse strands into a creole population.

As the city evolved during the nineteenth century the colonial characteristics faded. Nevertheless the administrative focus which had been established earlier persisted, but other economic and commercial facilities developed in a way peculiar to New Orleans. Financial and mercantile facilities tended to situate in the "uptown" sector, close to the

suburban sections constructed following American take-over. Entertainment facilities, reflecting the multi-racial character of the population, concentrated around the plaza, while retail commercial facilities accumulated along Royal Avenue, a location which persists to this day.

American control initiated following the Louisiana Purchase in 1803, set in motion forces that led to a more complex differentiation of the city region. The construction of drainage works permitted new suburban areas to be created. The city therefore evolved into three sectors: the Vieux Carre, the American sector and an immigrant sector, each of which was administered separately. It soon became apparent that a pattern of segregation by race and socio-economic standing attached to these sectors. The poorest people occupied the areas having the most unfavourable natural environment.

Today the Vieux Carre is maintained through strong preservation efforts but also by the continuing presence of its creole people and culture. The Vieux Carre therefore complements the more conventional CBD functions provided by the American sector, and indeed, has been able through its strong historical appeal to attract a share of the commercial strength of the central city.